

指揮命令系統から見た秋田藩戊辰戦争

—— 参謀・監軍・軍将 ——

畑 中 康 博

はじめに

本稿は、戦争を遂行する新政府と戦争に従事させられる藩という視角から慶応四年（一八六八）秋田藩戊辰戦争を見るものである。

慶応四年、秋田藩は二度にわたり戦争を起こす。一度目は四月十六日に出兵を開始し閏四月二十八日まで戦った庄内藩との戦争。二度目は、七月から九月にかけての対奥羽列藩同盟諸藩との戦争。そのどちらも新政府の命令に従ったことにより起きている。

慶応四年一月十六日、秋田藩に会津出兵が申し渡される。四月六日、奥羽鎮撫総督から出兵先が会津から庄内へと変更され、四月十六日出兵開始となる。実際の戦闘は閏四月十九

日から始まるが、一週間強で戦争をやめたのは、奥羽列藩同盟が発足し、秋田藩も加盟したからである。

同盟の目的は、会津・庄内両藩の討伐を進める奥羽鎮撫総督九条道孝、副総督沢為量、参謀醍醐忠敬に対し、両藩の寛典を求めるもので、仙台・米沢両藩が中心となって結成された。

奥羽鎮撫総督らは、会津・庄内討伐を実行に移せないばかりか、東北中の大名が寛典を願い出てくる事態を打開するため、仙台を離れ、七月一日秋田藩の本拠久保田城下に拠点を移した。そして、秋田藩に庄内出兵の再開を迫る。

七月四日未明、秋田藩主佐竹義堯は同盟離脱と庄内出兵の再開を決意し、再びの戦争を開始する。だが二度目の戦争は、庄内藩ばかりでなく、同盟離脱の制裁措置として攻め込

んでくる盛岡藩と仙台藩をも相手にした大規模な戦争となった。藩領北部の盛岡藩との戦いでは、一旦領内深く攻め込まれるも、反転攻勢により領外まで押し戻すことに成功し、九月二十日の休戦申入れによって終結した。しかし仙台藩・庄内藩と戦った藩領南部の戦いでは、雄勝郡・平鹿郡・仙北郡と戦線は後退を余儀なくされ、九月十六日に仙台・庄内両藩の部隊が撤退を始めるまで苦しい戦いを強いられた。

これが秋田藩戊辰戦争の大まかな流れであるが、これまで維新期の秋田藩をめぐる研究は、藩論が揺れ動き最終的に新政府側となった政治的な動きの解明に膨大なエネルギーが注ぎこまれてきた。⁽¹⁾

昨今、栗原伸一郎が、近世後期、幕府の政治力低下が顕著になるにつれ、諸侯が家格を超えた地域連携を行うようになり、奥羽列藩同盟はこの地域連携の一つの姿であるという見解を示した。⁽²⁾ 秋田藩主佐竹義堯が同盟結成を話し合っている白石会議に参加した戸村十太夫へ宛てた書状には「周囲に同調するように」と指示した一文がある。これは秋田藩の同盟加盟も、地域連携を見据えた上での判断だったといえる。このように考えると、秋田藩の同盟離脱についても理解が簡単になる。すなわち、藩にとっては仙台・米沢両藩中心の地域連携よりも、久保田城下に終結した奥羽鎮撫総督・副総督・参謀の命令の方が大事になるのである。

戦争を遂行する新政府とそれに従う藩。この関係性は戦争の際どのような形で浮かび上がるのか。⁽³⁾ この問題関心を持って秋田藩戊辰戦争に関する記録を見ると、戦場において藩士たちは「監軍」という役職の人物から様々な指図を受けていたことに目が留まる。

例えば「戊辰秋田藩戦記」七月六日条には、秋田藩が庄内戦争を再開したことにより部隊が出撃していく記述の最後に上田雄一・山本登雲助に監軍を命じ、秋田勢に差添ひ精々尽力すべく申付たる趣総督府より達あり。兩人即日新屋口に出陣せり

とあるように、秋田藩の部隊には奥羽鎮撫総督により上田雄一と山本登雲助という二人の監軍がつけられているのである。⁽⁴⁾ 秋田藩の部隊は「精々尽力する」監軍の指揮下で戦ったのである。

軍事史の視角から戊辰戦争を論じたものを見ると、銃砲の発達段階から論じたものが中心である。戊辰戦争で戦った部隊の装備は、古いスタイルでは鎧兜・槍・火縄銃という戦国時代さながらのものから、連装のライフル銃を装備した最新式のものまで新旧入り混じったものであった。この中で勝利を収めたものは、椎の実型の弾丸を用いる後装式施条銃を装備した部隊とその部隊を戦力として運用することができる有能な指揮官の有無だったと説かれる。⁽⁵⁾

秋田藩が戦争を有利に展開できなかった理由として、旧式の銃を用いていたことによるといふのは間違いない。⁷⁾

昭和十二年（一九三七）八月六日、郷土史家東山太三郎が戊辰戦争時有志隊（佐藤日向手）員だった佐々木眞綱と遊撃隊（荒川久太郎手）員だった片岡康治を招いて、戦争をふり返ってもらふ座談会を開いているが、その席上佐々木は、秋田藩の洋式部隊はミニエー銃やエンフィールド銃（両銃とも椎の実型弾丸を用いる先込式施条銃）を装備していたと証言している。加えて佐々木は、秋田藩の通常の部隊は施条を施していない銃を多く装備していたのに比べ、庄内藩は施条銃が多く、怖かったと話している。

だが、ここで注意しなければならないのは、秋田藩には由利諸藩と西南諸藩合わせて七千人を超える応援兵力がおり、秋田藩兵八六九八人と合わせると秋田藩領内に攻め込んでくる奥羽列藩同盟の兵力よりも多いという点である。⁸⁾ しかも薩摩藩や長州藩を始めとする西南諸藩の部隊が装備していた銃砲が同盟諸藩より劣っていたとは考えにくい。にもかかわらず、秋田藩を含む新政府軍が戦線を維持できずに敗退を繰り返したのは、銃砲の発達段階以外の要因があったと考えなければ説明がつかない。

そこで、本稿では、秋田藩戊辰戦争において、作戦を立案した新政府の「参謀」、前線の部隊で様々な指図を下した「監

軍」、そして実戦部隊を率いる秋田藩の「軍将」をつなぐ指揮命令系統に着目し、とりわけ次の二つの問題から戦争の特質を見いだしていきたい。

その第一は慶応四年四月と七月の二度の戦争で「参謀」「監軍」「軍将」のかかわりがどのように変化してきたかである。秋田藩と庄内藩が戦った慶応四年四月の戦争時、奥羽鎮撫総督は仙台、副総督は新庄にいた。しかし対奥羽列藩同盟との戦争となった七月から九月の戦いでは、総督及び副総督は秋田藩領内にいた。つまり戦争の激しさと作戦を下知する側とされる側の距離が全く異なるのである。前後二つの戦争に指揮命令系統の変化も見られるのかというのが第一点である。問題の第二は、慶応四年八月に奥羽鎮撫総督が秋田で戦う各藩部隊の隊士に「参謀添役」「監軍」「使役」といった役職を与えた点である。この中には秋田藩士中安泰治も含まれていた。それまで秋田藩の部隊を監視するのは、薩摩藩士や長州藩士だった。ここに中安が加わり、秋田藩士が秋田藩部隊を監視するのである。これは何を意味するのか。

本稿では指揮命令系統に関するこの二つの問題から、奥羽鎮撫を進める新政府が秋田藩にどのような従属を強いたのか、そして戦争遂行時の国家権力と地方藩とをつなぐ論理は何かを考えていきたい。

(表 1) 慶応 4 年 4 月に出陣した秋田藩部隊一覧

	出陣日	軍将	兵力	布陣地→進撃先
第 1 軍	4 月 16 日	渋江内膳	675 人	小滝→観音森
第 2 軍	4 月 27 日	小場小伝治	513 人	塩越→大須郷→観音森
		梅津千代吉	149 人	塩越→小砂川→女鹿
第 3 軍	4 月 27 日	梅津小太郎	365 人	百宅→庄内藩領増田村
		疋田八弥	172 人	矢島→庄内藩領増田村
第 4 軍	4 月 29 日	荒川久太郎	156 人	海路吹浦に上陸→女鹿村
本莊口 総大将	閏 4 月 15 日	佐竹大和	679 人	増満寺

「戊辰秋田藩戦記」(『秋田叢書 第 4 巻』)を中心に作成

一 慶応四年四月の庄内出兵における監軍と軍将

本節では、慶応四年四月から閏四月にかけて行った庄内出兵における、監軍と秋田藩の部隊との関係を述べる。

(1) 監軍の来藩

慶応四年(一八六八)四月十六日から始まった庄内出兵の部隊を(表 1)に示す。

仙台にいた奥羽鎮撫

総督から監軍として長
州藩士山本登雲助と薩
摩藩士長尾清右衛門が
来藩したのは出兵開始
二日後の四月十八日で
ある。二人は、秋田藩
家老戸村太夫と岡本
又太郎に、三日以内に
庄内藩への攻撃を開始
するよう伝えた。山本
と長尾は、閏四月二日、
現地で指揮をとるべく
由利郡に赴いた。そこ
で二人が本莊藩を通じ

て秋田藩軍事方に送ってきたのが次の書状である。

「史料 1」

以愚札申達候。不日打入候節今二も可被成候より、其御
方より之二番手佐竹大和殿人数又は津軽家応援隊之人
数、御地え到着相成候ハ、御見合せ、早々此方え御出張
相成候様御取斗給度、此旨早々御掛合申遣候。以上

辰閏四月四日

奥羽鎮撫総督使中

山本登雲助

長尾清右衛門

秋田表御軍事掛御役人衆

山本と長尾が秋田藩に要求したのは、秋田藩大館城主佐竹
大和の部隊と弘前藩の部隊の出陣だった。佐竹大和の部隊は
四月二十九日に大館(現大館市)を発ち、閏四月四日八時
過ぎに久保田へ到着した。また弘前藩の部隊は、閏四月四日
から十三日にかけて久保田に到着している。佐竹大和の軍勢
は六七九人、弘前藩の部隊は六二四人である。右の書状が久
保田に届いたのは、佐竹大和の軍が久保田に到着し、弘前藩
の部隊が集結するのを待っているところであった。この要請
に対する藩庁の返答は次の通りである。

「史料 2」

貴簡謹て奉拝見候。然は今日討入之都合二も可被成候よ
り、二番手並二津軽家応援之人数爰許着二相成候ハ、見

合せ候。早々其地へ出張いたし候よふ可取斗之段、即重役え申聞候処、被仰下候御旨趣之儀承知仕候。(以下略)

辰閏四月五日

秋田軍事方

奥羽鎮撫御副督御使節様

〔史料1〕と〔史料2〕の書状で明らかなのは、監軍と秋田藩・本莊藩との力関係である。山本登雲助と長尾清右衛門は、本莊藩の飛脚を用い秋田藩に部隊の出陣を求め、秋田藩はその意向に従おうとしている。監軍は書状を届けるのには本莊藩を利用し、秋田藩の兵を出させる。つまり、監軍の二人は、秋田藩の庄内戦争開始直後から、自分たちの意のままに地方の藩を動かそうとしているのである。

次に慶応四年四月の戦争で秋田藩に来藩したもう一人の監軍である長州藩士上田雄一について見てみよう。

〔史料3〕

各様御壮健珍重之御儀御座候。陳ハ拙者儀、副総督より使者被申付、今曉当表え致着候。就てハ庄内御討入彼是之事件致御談判度儀、猶御藩え当り候官軍之御旗守護持参二付、致御渡候間被仰含、急速旅宿迄被成御出可被下候間、右得御意候。以上

閏四月四日

長州藩 上田雄一

秋田藩長官各中様

上田は、新庄（現山形県新庄市）在陣の奥羽鎮撫副総督沢

為量から派遣された。上田は、久保田にはなく、閏四月四日、矢島（現由利本莊市矢島町）で庄内藩への攻撃待機中の軍將梅津小太郎のもとに現れた。〔史料3〕は上田が菊紋旗を下賜するので自分の宿所まで取りに来るよう秋田藩の軍將たちに要求したものである。そして上田はそのまま監軍として梅津小太郎の部隊を指図するようになる。梅津手に属していた横手給人石川教定の日記には上田の人物像が記してある。

〔史料4〕

一当十七日、百宅え参候沢三位様より使節上田雄一と申人、彼是差図致し、同人事年齡三十一式位と相見得、見目よし勢高く文武兼備之仁と相見得申候よし。手賀之嘶承り申候。

（傍線筆者、以下同じ）

石川は同僚である手賀の話として、上田は推定年齡三十一歳前後、見目よく背の高い人物とある。傍線部、彼は差図致しの一語は、突如戦場に上位者として現れた指図がましい監軍の実像を想像させるに十分である。

（2）監軍の指図

秋田藩の庄内進攻作戦は（表1）の第一・二・四軍が鳥海山の西側山麓の小高い峰である観音森の奪取と浜街道を南下する作戦、第三軍が鳥海山麓東側の百宅から峠を越えて南下する作戦の二つに分かれている。このうち鳥海山西側の作戦は

次の通りである。⁽²⁾

①秋田藩一番隊洪江内膳の軍は、十九日薄暮小滝村を出発。観音森を二十日未明に攻撃する。

②二番隊軍將小場小伝治の軍は、十九日暮れに塩越を出発し浜街道を南下。洪江軍の観音森攻撃に合わせて山麓を攻め上る。

③荒川久太郎の第四軍は、船で庄内藩領吹浦へ上陸し、敵の背後に廻り、洪江・小場の軍と庄内藩兵を挟撃する。

また、百宅から攻め下る第三軍の作戦も閏四月十九日未明に発動され、藩士たちが山道を駆け下りている。そして「戊辰秋田藩戦記」閏四月十八日条を見ると、山本登雲助は荒川久太郎を指図、上田雄一は第三軍の軍議を決したとある。

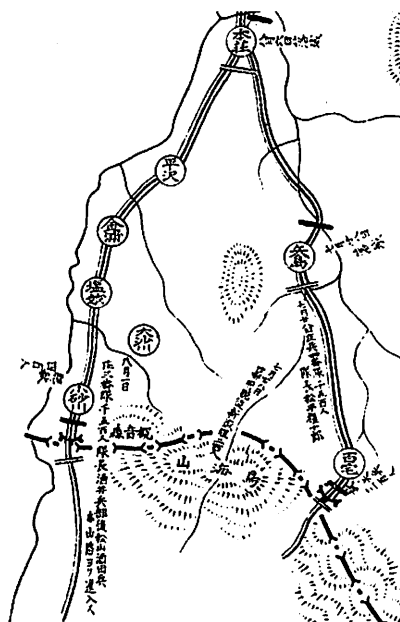
次の史料は、第三軍遊軍の正田八弥手に属していた横手給人芳賀織右衛門の日記閏四月八日条であるが、これを見ると、山本は浜街道筋で、上田は百宅でという具合に別々に作戦を立てていたわけではなく、三人の監軍が統一した見解のもとに浜街道筋・百宅双方の軍へ指図していたことがわかる。

【史料5】

一同八日、引田公より拝見被仰付書付之写。

庄内諸藩口為防禦、一之手ヲ以先鋒応援ニシテ、夫々被致御手配候付ては、二ノ手内半分程弘川口・増田口・大須郷口・小瀧口等エ又応援之心得ニモ致御手配置候

「明治戊辰戦役賊軍侵入地図（部分）」
(秋田県立博物館 菅江真澄資料センター寄託資料)



間、御屯処段々御繰出ニシテ、先鋒之動援ニ依り候テ被仰合可被成御尽力。以上

副督府 山本登雲助

上田雄一

長尾清左衛門

本庄口二ノ手御出張 御隊長中殿

八嶋口二ノ手御出張 御隊長中殿

本庄口二ノ手隊長は小場小伝治、矢島口二ノ手隊長は正田八弥である。この記述がなされたのは閏四月八日、作戦発動

の十一日前である。見落としてならないのは、秋田藩の軍將は、藩主や藩庁軍事方から部隊の展開や作戦の発動を命令されたわけではないという点である。秋田藩の軍將に作戦を下知するのは、現地の監軍なのである。

百宅で攻撃開始の下知があったことを評定奉行会田多仲・副役樋口忠藏へ知らせた梅津小太郎手陣場奉行根本周助の書状を見てみよう。

〔史料6〕⁽³⁾

一筆啓上仕候。梅雨之節愈各様洪福奉珍賀候。然は到着使節より今十九日八時出兵夜襲可致旨之指図有之、只今惣軍出兵、矢嶋軍勢案内として追々進ミ、其跡え高屋五左衛門・山県三郎一手宛左右間道より夜中之山を越、翌廿日未明庄内え討入都合。尤左右両山へ次々大筒、其次は小筒、其次戦士槍を入れ突崩候手割、壹両日中勝を奏し可申候。(以下略)

閏四月十九日

根本周助

会田多仲様

樋口忠藏様

傍線部に、到着使節、つまり上田雄一が攻撃開始の命令を下したとある。右の書状と共に根本が送った「使節より被相渡候手割写」も見てみよう。

閏四月十九日昼八ツ時より百宅出足。翌廿日暁天前、田股

口当貝沢村口間道より増田え討入候手割

一夜襲 田股口

先鋒六拾人程

内、矢嶋一二ノ遊撃隊參拾五人。佐竹銃隊足輕貳拾五人。右先鋒より二三丁相後れ砲声之相図ニ繰込候援兵百人程。

内、佐竹鎗隊貳拾五人、矢嶋一之手銃隊半小隊、佐竹銃隊士分貳拾五人、同藩足輕同三拾人程。

一夜襲 貝沢口間道

先鋒六拾人程

内、矢嶋一ノ手銃隊半小隊、佐竹銃隊四拾人程

同、右先鋒より二三町相後れ、砲声之相図繰込援兵百人程。内、佐竹鎗隊合隊六拾人程。矢嶋二ノ手銃隊三拾八人程。

一病人等有之は不殘百宅え相殘候事。

其余之兵有之候は、先於百宅ニ防禦可被相殘候事。

右之手割にて御座候間、増田之敵兵討払、乗取之上ハ、觀音森え味方為取回、両三軒放火時宜ニ応し、当両口援兵先達之内を以上寺え向け討入、先鋒兵之儀ハ増田・貝沢村等にて防禦。余は現場之隊長駆引ニ有之候事。

軍將梅津小太郎に対する監軍上田雄一の戦闘開始の下知は

単なる指図ではなく、山道を攻め下る作戦について、部隊別の配置、人数、防御など細かに指示している。

実際の戦闘の場面で、監軍は秋田藩士にどのような指図をしたのかを示す一例を次に示す。

〔史料7〕

同（七月）廿三日朝四つ時にも候や、兼て先鋒打入小場小伝治之隊大須郷御滞陣之処へ庄賊襲撃にて大小砲打合と相成、双方之散弾山岳ニ響き夥敷相聞得候故、（埧満）寺外高森へ駆登り見渡候得ハ、間もなく川袋村へ火の手揚り、砲戦々烈敷相成候故、槍隊甲冑にて汐越村へ繰出候所、途中にて使節山本登雲助差心得ニハ、即今銃隊砲戦之場へ槍隊混雜にてハ却て打合の妨け、若し同士討等有之候ても大變ニ候故、其隊は是より金の浦へ引上、此方差図次第進軍可致報ニ付、槍隊甲冑之俵にて引払い、同所にて番兵、晩陣屋へ引取り休息仕候。

（一）補註筆者

これは、明治三年（一八七〇）八月に書かれた佐竹大和手銃隊組頭根本源三郎の戦争履歴書の一節である。ここには、戦闘に加わろうとした佐竹大和の槍隊が、監軍山本登雲助の指図により退却させられたとある。監軍が佐竹大和に槍隊の退却を指図したわけではなく、直接槍隊に指図している点に注目したい。戦場の藩士たちは、自軍の軍将よりも監軍の指図に従わなければならなかったのである。

藩主と藩士は命令と服従の直接的な関係で結ばれている。それゆえ、藩主や軍将から藩士に下される下知は命令である。だが、藩の上部機関である新政府から派遣されてきた監軍と、藩主が軍団長として任命した軍将の関係は直接的な命令関係にはない。間接的な命令関係である。それゆえ、監軍の軍将に対する下知は、命令ではなく指図ということになる。

もし監軍が命令により秋田藩の軍を動かすのであれば、監軍は藩主に、藩主は軍将にという形で命令が下達され動くというのが筋である。しかし、それでは戦場の流動的な事態に対処できない。それゆえ、監軍は軍将に指図を下知するのだが、戦闘の場面になると軍将さえも通さずに直接秋田藩士たちを動かしたのである。ここから指摘できるのは、秋田藩戊辰戦争とは秋田藩主や軍将たちにとって指揮権のない戦争だったということである。

命じる側と、命じられる側、これが間接的な命令関係である指図でつながっている、これが指揮命令系統から見た戊辰戦争の特質であるといえる。

二 慶応四年七月の対奥羽列藩同盟戦争における 監軍上田雄一と軍将古内左惣治

秋田県公文書館所蔵の古内家文書には、慶応四年（一八六

八) 七月七日に出陣した秋田藩三番手軍将古内左惣治に宛てて送られた監軍上田雄の指図が記された書状が多数残されている。それを〈表2〉に示すが、古内への指図は、部隊移動、斥候、合言葉の決定、放火、戦闘開始など、あらゆる種類のものがある。

この節では、上田雄一の古内に対する指図と、古内手戦士貝塚久吉の日記から、慶応四年七月から九月にかけて行われた対奥羽列藩同盟戦争における監軍・軍将・藩士の関係を見ていきたい。

(1) 古内左惣治手の軍事行動について

まず〈表2〉から古内左惣治の軍の動きを見てみよう。古内左惣治の軍は七月七日に久保田を発ち羽州街道を南下、大曲から横手盆地西側の道を西馬音内(現羽後町)に抜け、笹森丘陵を越えて十五日に矢島に到着した。しかし庄内藩兵が矢島に追ると、来た道に戻る形で横手盆地に出て、盆地西側の道を北上し八月十四日神宮寺(現大仙市神宮寺)に至る。神宮寺では玉川沿岸の大河原(大仙市松倉)に滞陣。そして八月二十三日、盛岡藩の小部隊が生保内口(現仙北市田沢湖)に来襲する情報が入ると、大河原から生保内へ移動。しかし大きな戦争にならなかったことから生保内から下延村(現仙北市角館町下延)へ移動し、そこで仙台藩兵が退却するまで

留まった。

従来の秋田藩戊辰戦争研究においては、軍将は誰の指示で部隊を動かしたのかについては全く指摘されてこなかった。仙台藩・庄内藩の進攻により、秋田藩は平鹿郡から仙北郡へ戦線を後退させ、平鹿郡と雄勝郡は占領されるに至るのだが、この退却は藩主又は秋田藩軍事方の命令、若しくは軍将としての自らの判断によるものではない。古内は監軍に指図されて退却の行動をとったのである。

慶応四年八月八日、上田から古内に宛てられた書状をあげる。

〔史料8〕

大沢村渡し場脇大砲并固メ御人数不残御引揚ニ相成候。

〈後略〉

八月八日

また、このことについて古内手戦士の貝塚久吉は、次のように日記に記している。

〔史料9〕

一大沢川辺ヨリ引取、深井村ニテ昼食暫休息。賊来ル注進有リテ川辺へ繰出、待テト不来、又同村へ引取宿陣、晝志賀幸之進来リ。浅舞口破レ、賊四方ヨリ押込来ル由。上田ヨリ沙汰有リ角間川迄引揚之儀伝之。

古内左惣治がいた大沢村と貝塚がいた深井村は、いずれも

(表 2) 古内左惣治手の動きと監軍上田雄一の指示

月日	古内左惣治 の位置	上田雄一の書状（秋田県 公文書館古内家文書「資 料名」（資料番号）	上田雄一の書状の内容	古内手 貝塚久吉の位置
7月7日	戸嶋			
7月8日	刈和野			
7月9日	神宮寺			
7月10日	角間川			
7月11日	西馬音内			
7月12日	田代村			
7月13日	田代村			久保田→刈和野
7月14日	笹根子村	覚（戊辰戦争梅津・古内 隊への指令）（古内 111）	梅津隊のうち一手は百宅 で先鋒防御、残りは小瀧 村へ行き山本登雲介の指 揮下に入れ。古内隊の一 手は百宅先鋒防御、残り は弘川口へ	刈和野→西馬音内
7月15日	矢島			西馬音内→平根
7月16日	矢島			平根→矢島
7月17日	矢島			矢島本陣詰
7月18日	矢島			矢島市中廻り
7月19日	矢島			矢島
7月20日	矢島			矢島
7月21日	矢島			矢島
7月22日	矢島			矢島→薬師堂
7月23日	矢島			薬師堂→行者堂
7月24日	矢島			行者堂→矢島
7月25日	矢島			矢島
7月26日	矢島	[書状]（戊辰戦争戦況報 告と指令）（古内 112）	大瀧村に賊襲来し合戦 に。今日中に銃隊を笹子 へ派遣せよ	矢島
7月27日	矢島			矢島→百宅
7月28日	矢島→田代 村			百宅（戦鬨）→田代村
7月29日	田代村→大 沢村	[書状]（戊辰戦争矢島口 への指令）（古内 117）	大沢を守備せよ	田代村→大沢村
8月1日	大沢村	[書状]（戊辰戦争矢島口 への指令）（古内 101）	百宅村口争戦の様子と死 傷者を報告せよ	大沢→横手→大沢（横手 在陣の小鷹狩源太へ使 者）
8月2日	大沢村			大沢村
8月3日	大沢村	[書状]（戊辰戦争 矢島口への指令） （古内 105）／同（古内 122）	敵の夜襲に備えよ／ 万一異変があったら貝と 太鼓で知らせろ	大沢村
8月4日	大沢村	[書状]（戊辰戦争戦況報 告と指令）（古内 127）	院内口も昨日官軍進撃に つき斥候 1 人を湯沢辺に 出せ	大沢村
8月5日	大沢村	[書状]（戊辰戦争矢島口 への指令）（古内 108）／ [書状]（戊辰戦争戦況報 告と指令）（古内 114）	探索人入れ込みの指示／ 南の方角に火の手が見え るので斥候 1 人を出せ	大沢村
8月5日	大沢村	[書状]（戊辰戦争矢島 口への指令）（古内 109） ／同（古内 103）	当口へ官軍兵が差し向け られるので、沼館宿の 宿割りをするように／ 西洋銃手続き 1 人宛	大沢村

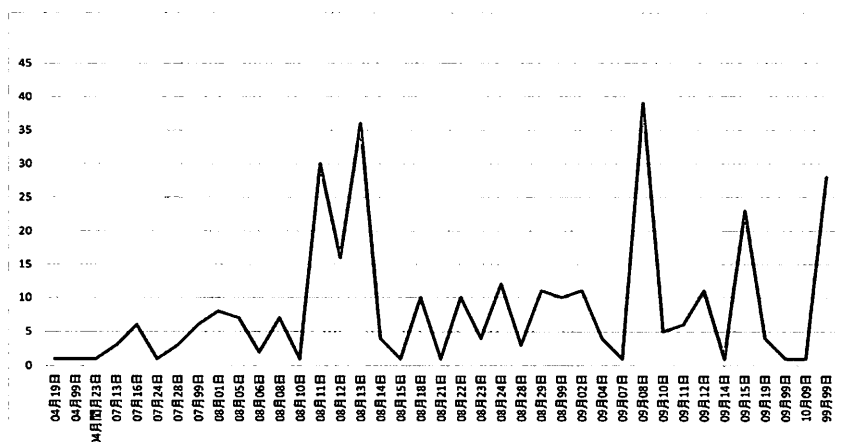
月日	古内左惣治 の位置	上田雄一の書状（秋田県 公文書館古内家文書「資料 名」（資料番号））	上田雄一の書状の内容	古内手 貝塚久吉の位置
8月6日	大沢村	〔書状〕（戊辰戦争矢島口 への指令）（古内 104）／ 〔書付〕（戊辰戦争指令）	合辞は「逃」「行」にする／ 状況不詳の報知があった ので知らせる	大沢村
8月7日	今宿村	〔書状〕（戊辰戦争矢島口 への指令）（古内 99）	少数の銃隊で夜襲をかけ よ	今宿村
8月7日	今宿村	〔書状〕（戊辰戦争戦況報 告と指令）（古内 113）	湯沢辺大火につき、斥候 1人を出し報告を	今宿村
8月7日	今宿村	〔書状〕（戊辰戦争軍議の 指令）（古内 115）	軍議を行う。小田野刑部・ 今村喜左衛門を同道し来 られたし	今宿村
8月8日	今宿村	〔書状〕（戊辰戦争指令） （古内 124）	大沢村より退却せよ	今宿村
8月9日	角間川村	〔書状〕（戊辰戦争矢島口 への指令）（古内 97）	探索人を入れ込み、放火 を薦め沙汰せよ	角間川村
8月9日	角間川村	〔書状〕（戊辰戦争矢島口 への指令）（古内 98）	大曲村まで只今より引き 揚げよ	角間川村
8月10日	角間川村	〔書状〕（戊辰戦争各隊長 への指令）（古内 129）	大曲迄退却し、一泊し、 神宮寺まで退却せよ	角間川村
8月10日	角間川村	〔廻文〕（戊辰戦争惣軍引 き揚げ指令）（古内 132- 2）	惣軍大曲迄退却せよ	角間川村
8月11日	大曲村	〔書状〕（戊辰戦争矢島口 への指令）（古内 92）	花館村へ退却せよ	大曲村
8月11日	大曲村	〔書状〕（戊辰戦争戦況報 告と指令）（古内 126）	神宮寺へ退却せよ	大曲村
8月12日	花館			花館
8月13日	花館			花館
8月14日	大河原			花館（角間川戦争敗戦を 知る）→神宮寺
8月15日	大河原	覚（戊辰戦争矢島引き揚 げ以来の軍配置）（古内 133）	四ツ谷湯・四ツ谷小河原・ よふとこ之向・松倉村・ 小杉山村・下延村部隊配 置	大河原
8月16日	大河原			神宮寺
8月17日	大河原			神宮寺
8月18日	大河原	〔書状〕（戊辰戦争矢島口 への指令）（古内 94）	先日手続きのミネヘール 銃を渡すので受け取るよ うに	神宮寺
8月19日	大河原			神宮寺
8月20日	大河原	〔書状〕（戊辰戦争矢島口 への指令）（古内 91）／ 覚（戊辰戦争軍配置と武 器手配について）（古内 135-2）	只今より神宮寺まで 斥候に出たいが乗馬 がない。1疋貸せ／ 獅子鼻台場・下ノ河原台 場・立の江向ひ台場・権 現山台場への部隊配置の 指示	神宮寺
8月21日	大河原			神宮寺
8月22日	大河原			神宮寺
8月23日	大河原			神宮寺台場（花館合戦眺 めるだけ）
8月24日	生保内村	〔書状〕（戊辰戦争矢島口 への指令）（古内 95）	生保内口警備、渋江兵部 と交代	生保内村

月日	古内左惣治 の位置	上田雄一の書状（秋田県 公文書館古内家文書「資 料名」（資料番号）	上田雄一の書状の内容	古内手 貝塚久吉の位置
8月24日	生保内村	[書状]（戊辰戦争矢島口 への指令）（古内96）	これよりその方まで罷り 越す	生保内村
8月25日	生保内村	[書状]（戊辰戦争指令） （古内125）	大急用があるので1人遣 わしてほしい	生保内村
8月26日	下延村	[書状]（戊辰戦争矢島口 への指令）（古内106）	只今より下延村へ繰り出 せ	下延村
8月26日	下延村	[書状]（戊辰戦争薩摩隊 との交代について）（古 内118-2）	一手残らず薩州兵と交代 し生保内口へ向かえ、と 神宮寺より指示あり	下延村
8月26日	下延村	[書状]（戊辰戦争矢島口 への指令）（古内100）	穴庫になったので早々に 繰り出せ。夜になれば台 場見分も難しい	下延村
8月27日	下延村			下延村
8月28日	下延村	[書状]（戊辰戦争矢島口 への指令）（古内93）	矢島衆が築造した台場へ マタギ5人を派遣せよ	下延村
8月29日	下延村	[書状]（戊辰戦争矢島口 への指令）（古内120）	矢島2人を貝塚久吉が引 き受けて台場を守備して いたが、獅子鼻台場へ移 動させよ	下延村
8月晦日	下延村	[書状]（戊辰戦争監軍局 よりの指令）（古内131）	水沢口に賊兵が現れた ら、25人の銃隊で防衛 せよ	下延村
9月1日	下延村	[書状]（戊辰戦争戦況報 告と指令）（古内116-2）	貝塚手と薩州を交代せよ	下延村
9月2日	下延村			下延村
9月3日	下延村			下延村
9月4日	下延村			下延村
9月5日	下延村			下延村
9月6日	下延村			下延村
9月7日	下延村			下延村
9月8日	下延村			下延村
9月9日	下延村	[書状]（戊辰戦争矢島口 への指令）（古内107）	早々に1人差し出せ	下延村
9月10日	下延村			下延村
9月11日	下延村	[書状]（戊辰戦争矢島口 への指令）（古内110-2）	刈和野に近々賊が襲来す るので、貝塚久吉手15 人を小杉山まで差し向 け、反撃の先陣とせよ	下延→小杉山（神宮寺退 却の新庄藩士斥候に会 う）
9月12日	下延村	[書状]（戊辰戦争指令） （古内123-2）	小杉山村へ部隊を送れ	小杉山→下延村
9月12日	下延村	[書状]（戊辰戦争指令） （古内128）	刈和野へ長州藩・振遠隊 進撃につき、斥候をもっ て報告せよ	小杉山→下延村
9月12日	下延村	[書状]（戊辰戦争水沢口 軍配置）（古内146）	古内手の寺崎・鷲尾・信 太・貝塚の配置	小杉山→下延村
9月13日	下延村	[書状]（戊辰戦争矢島口 への指令）（古内102）	争戦御届書を早々に提出 せよ	下延村
9月14日	水沢			下延→水沢→荒川→境
9月15日	境			境（大合戦）
9月16日	船岡山			境→荒川
9月17日	峠吉川			荒川→淀川
9月18日	浅舞			淀川→刈和野→神宮寺

月日	古内左惣治 の位置	上田雄一の書状(秋田県 公文書館古内家文書「資 料名」(資料番号))	上田雄一の書状の内容	古内手 貝塚久吉の位置
9月19日	浅舞			神宮寺→横手
9月20日	湯沢			横手→湯沢(軍将と会う)
9月21日	鶴巣			湯沢→西馬音内→大沢
9月22日	大沢			大沢(初風呂)
9月23日	矢島			大沢→老方→矢島
9月24日	矢島			矢島
9月25日	矢島	[書状](戊辰戦争戦況報 告と指令)(古内 134)	肥州隊長・今宮大学・そ の他殿への指図。塩越・ 矢島から久保田までの街 道の人馬雜立が円滑に行 くよう尽力せよ	矢島
9月26日	矢島			矢島
9月27日	矢島			矢島
9月28日	矢島			矢島
9月29日	矢島			矢島
10月1日	矢島			矢島→濁川→本境薬師堂
10月2日	矢島			本境→濁川→矢島
10月3日	本荘			矢島→滝沢→本荘
10月4日	塩越			本荘→塩越
10月5日	塩越			塩越
10月6日	本荘			塩越→平沢→本荘
10月7日	滝ノ下			本荘→滝の下
10月8日	埴			滝の下→新屋(本陣)
10月9日				久保田
10月10日				久保田
10月11日				久保田
10月12日				久保田
10月13日				久保田
10月14日				久保田→松濤村
10月15日				松濤→淀川→刈和野
10月16日				刈和野→角館
10月17日				(総督府より凱旋許可)
10月18日				角館→刈和野
10月19日				刈和野→戸島
10月20日				戸島→久保田

佐竹文庫「戊辰戦争関係書類」(秋田県公文書館 AS212.1-72)・古内家文書(同館)・貝塚清直「出陣記録」より作成

秋田藩士の戦死日



「軍功取調一」（秋田県公文書館 県 A-237-1）「軍功取調二」（県 A-237-2）「軍功取調三」（県 A-237-3）より作成

現横手市雄物川町の集落で、雄物川を挟んだ両側に位置している。古内は雄物川西側山際の深井村に陣取り、貝塚は雄物川を渡河した深井村にいた。日記には、大沢・深井両村より東方の浅舞村で友軍が負けたため、角間川（現大仙市角間川町）まで北上せよという上田の指図があったことが記されている。

自軍の部隊移動について記した貝塚の「出陣記録」八月十二日条を次にあげる。

〔史料10〕

一大曲ヨリ花立へ引ク。烈敷一戦モ不為、引コソ遺憾ナレ。我等軍議へ不加レハセンカタナシ。介川敬之進殿手・茂木秀之助殿手ハ角間川ニ残り居ルニ、古内手ノミ引ハ如何ナル軍議ニヤ。上田雄一依差図、花立村中ノ台場一ヶ所請取、長福寺へ宿陣。

秋田藩戊辰戦争時、秋田藩士がいつ戦死したのかをグラフ化すると、横手籠城戦のあった八月十一日、角間川の戦いのあった十三日、そして福部羅の戦いがあった九月八日に戦死者が集中していることがわかる。ここから秋田藩が戦力を著しく減少させたのは、この三つの戦いで負けたことが大きい。（表2）を見ると、古内左惣治の軍は横手や角間川の近くにいながら全く戦闘に参加していない。友軍が苦戦しているにもかかわらず、近くにいる古内の軍が戦闘に参加しないのは、

攻撃の指図が監軍から出ないからである。「烈敷一戦モ不為、引コソ遺憾ナレ」という傍線部貝塚の言葉には、面と向かつては言えない上田への抗議の念が込められている。

(2) 監軍指図の変化

上田が古内に大曲・花館・神宮寺への退却を下知したのは、この時期奥羽鎮撫副総督の沢為量が神宮寺にいたからである。沢自身は、八月八日に横手城に現れ城将戸村大学に戦場へ出陣するよう促すも、沢は大曲方面への全軍退却を命じている^③。神宮寺は西側に仙北郡・平鹿郡を一望に見渡すことのできる小高い山並みがある。また西側には玉川が流れている。沢副総督を中心とする新政府軍の作戦は、神宮寺を中心に西側の山岳陣地、東側の河川を利用した防御陣地により、仙台藩・庄内藩の北上を阻止しようとしたのである。

古内左惣治隊は玉川沿いの大河原に布陣を命じられたことが、次の資料からわかる。

〔史料11〕^④

覚

一早朝庫之助同様花立引揚、神宮寺大川原へ着。上田高友ヨリ手配左ノ如シ。

一四ツ谷^⑤と申所一ヶ所

此固メ当藩信太勇一手・新庄四番隊拾人・長州二人。

「明治戊辰戦役賊軍侵入地図（部分）」
(秋田県立博物館 菅江真澄資料センター寄託資料)



一同所之内、大川原浅瀬一ヶ所

此固メ当藩鷲尾庫之助一手・新庄四番隊拾人・長州二人。

一よふとこ之向ふ通二ヶ所

此固メ当藩貝塚久吉一手・新庄四番隊拾人・長州二人・新庄和統一小隊・同藩ミネヘール四番隊拾人・長州二人。

一松倉村之内はら島浅瀬一ヶ所

此固メ当藩大越強太一手・新庄四番隊拾人・長州二人。

一小杉山村、新庄和統一小隊・長州二人。

一下延村より松倉村迄之間

此固メ新庄壹式番隊・和銃隊二小隊・長州八人。

右之通致手配可申候。

八月十五日

監軍 上田雄一

秋藩御隊長中

新藩御隊長中

ここで注目すべき点は二つある。第一は上田は貝塚や大越といった古内手の小隊長を名指ししていることである。第二は各配置箇所には必ず長州藩士をつけていることである。上田は、小隊長級の人物を把握し、二名ずつつけている長州藩士を使つて動かしていたのである。こうなると軍將古内左惣治の役割は、上田の出す細かい指図に則つて配下へ命令を下すのみとなり、自分の裁量を差し挟む余地はなくなる。

軍將が配下の小隊長に対する指揮権を失うのは、九月に入ると一層顕著になる。貝塚の「出陣記録」九月一日条には、上田が直接貝塚へ手紙を寄こしたとある。

〔史料12〕

一〈中略〉折内長藏上田ヨリ書状持参左ノ如シ。

立石村薩州応援松倉へ引揚候由ニツキ、下延村へ繰上り候寺崎手、只今ヨリ立石へ差返不申候テハ、空虚ト相成居候ニツキ、御手大村方其段御達被成候て、早々只今下

延村先御請場へ御引取相成候様御取計可有之候。本之通御繰戻御沙汰ハ今朝角館ヨリ沙汰相成申候。以上

九月朔日

秋田藩

貝塚久吉殿

監軍 上田雄一

急用 従下延村

書状には、立石村（現大仙市）にいる薩摩の部隊を松倉（現大仙市松倉）へ、下延村（現仙北市角館町下延）にいる秋田藩寺崎の部隊を立石村へ、大村藩の部隊と貝塚の部隊を下延村へ移動せよとある。では、このとき上田は軍將古内にどのような指図をしたのか。

〔史料13〕

〈前略〉大村より応援兵・貝塚手繰戻し防御相成候ニ付、爰元ニは左様承知、薩州松倉迄廻達有之候間、貝塚手繰戻之上ハ、寺崎手立石え御繰戻し薩州より御交代有之様御沙汰有之也（後略）

九月朔日

上田が古内に下知したのは、立石・下延・松倉各村を準備する部隊の配置換えについて、寺崎へ移動を命じよという点で、貝塚の移動については、上田が直接移動を命じたので「左様承知」されたしで済まされている。

監軍が軍將配下の小部隊を動かす、軍將には事後承諾で済

ます。前節で慶応四年四月の秋田藩戊辰戦争の特質は、藩主や軍將の指揮権なき戦争であるとしたが、七月以降は、それがより一層進んだ形になっていることが確認できる。

三 秋田藩士中安泰治の監軍就任とその論理

慶応四年（一八六八）秋田藩にとつての戊辰戦争は、新政府から庄内出兵を命じられたことで始まった。秋田藩の部隊は、当初から奥羽鎮撫総督から派遣された山本登雲助や上田雄一といった監軍の指図のもとに戦った。このことだけを見ると、あたかも秋田藩は新政府中枢に入り込んだ西南諸藩の下風に立った観がある。

だが、八月に入ると奥羽鎮撫総督は参謀添役・監軍・使役の人事任命を相次いで行い、その中で秋田藩士中安泰治も監軍に任命している。本章では、奥羽鎮撫総督が行った人事任命から新政府と藩の関係を考えていきたい。

（1）奥羽鎮撫総督の人事任命

慶応四年八・九月、奥羽鎮撫総督は応援兵力として秋田に來た各藩の藩士たちを自分の裁量で参謀添役・監軍・使役に任命している。〈表3—1〉

任命の際の文言から、参謀添役は臨機の指揮と戦策を行う

役職、監軍は戦地の見察・賞罰・軍中取締を行う役職、そして使役は戦場巡見・敵動靜の報告を行う役職であることがわかる。仙台藩・庄内藩が退却を始め、戦争の趨勢が明らかになった九月二十日、奥羽鎮撫総督は参謀添役・監軍・使役に金子・ピストル・毛布を下賜した。⁽³⁵⁾

〈表3—2〉は〈表3—1〉を日付順に並べたものである。これを見ると、人事任命の時期は、参謀添役と監軍は八月上旬、使役は八月中旬に集中していることがわかる。これは秋田藩への援軍が多数來藩する中で、作戰の立案と部隊監視に関する役職の任命が最初になされ、ついで伝達や斥候の役を担う人物を指定したということであろう。

〈表3—3〉は〈表3—1〉を藩ごとにまとめてみたものであるが、任命を受けた人物の出身藩は、長州藩士と肥前藩士が多いことがわかる。もともと両藩は同数であるが、佐賀藩は使役が多い。ここから、戊辰戦争秋田口の戦いにおける作戰の立案と部隊監視は、長州藩士が中心的な役割を担ったということがいえる。

〈表4〉は秋田藩に來藩した応援兵力の一覧である。これを〈表3—2〉と合わせて見ると、参謀添役・監軍・使役の任命は、八月中旬以降に來藩した軍を対象にしたわけではなく、七月來戦い続けている部隊を対象にしていたことがわかる。つまり、奥羽鎮撫総督による軍事役職の人事任命は、既

〈表 3-1〉慶応 4 年 8・9 月の奥羽鎮撫総督による人事任命一覧

No	月日	人名	所属名	就任役職名	任命者	任命の際の文言	9 月 20 日賞賜
1	8 月 6 日	岸良彦七	薩摩藩	監軍	奥羽鎮撫総督府	戦地の見察・賞罰・軍中取締	20 両・毛布 1 枚
2	8 月 6 日	高津愼一	長州藩	監軍 (8 月 13 日免)			なし
3	8 月 6 日	中尾栄吉郎	長州藩	監軍 (8 月 13 日免)			なし
4	8 月 6 日	牟田口徳太郎	肥前藩	監軍 (8 月 13 日免)			—
5	8 月 7 日	桂 太郎	長州藩	参謀添役	奥羽鎮撫総督府	臨機の指揮・戦策委任	30 両・ピストル 1 挺
6	8 月 7 日	和田五左衛門	薩摩藩	参謀添役			30 両・ピストル 1 挺
7	8 月 7 日	石田英吉	長崎振遠隊	参謀添役			30 両・ピストル 1 挺
8	8 月 7 日	大山荘太郎	越前藩	参謀添役			30 両・ピストル 1 挺
9	8 月 7 日	平井小左衛門	小倉藩	参謀添役			30 両・ピストル 1 挺
10	8 月 7 日	田村乾太左衛門	肥前藩	参謀添役			30 両・ピストル 1 挺
11	9 月 6 日	和田五左衛門	薩摩藩	—	副総督府	薩摩本営でも軍事を勤めよ	—
12	8 月 8 日	安村桜太郎	長州藩	使役	奥羽鎮撫総督府	戦場巡見・敵動静の報告	20 両・毛布 1 枚
13	8 月 8 日	樺山仲左衛門	薩摩藩	使役			20 両・毛布 1 枚
14	8 月 9 日	上田雄一	長州藩	参謀添役監軍兼務	奥羽鎮撫総督府	臨機の指揮・戦場巡見・兵隊進退の号令	30 両・ピストル 1 挺
15	8 月 9 日	山本登雲介	長州藩	参謀添役監軍兼務			30 両・ピストル 1 挺
16	8 月	館山善左衛門	弘前藩	参謀添役	奥羽鎮撫総督府	臨機の指揮・戦策委任	30 両・ピストル 1 挺
17	8 月	福島礼助	肥前藩	参謀添役			30 両・ピストル 1 挺
18	8 月	杉山新五右衛門	筑前藩	参謀添役			30 両・ピストル 1 挺
19	8 月 12 日	牟田口徳太郎	肥前藩	使役	奥羽鎮撫総督府	戦場巡見・敵動静の報告	20 両・毛布 1 枚
20	8 月 12 日	鎌田英三郎	小倉藩	使役			20 両・毛布 1 枚
21	8 月 12 日	朝倉孫右衛門	肥前藩	使役			20 両・毛布 1 枚
22	8 月 12 日	永山已一郎	肥前藩	使役			20 両・毛布 1 枚
23	8 月 12 日	馬渡作二郎	肥前藩	使役			20 両・毛布 1 枚
24	8 月 12 日	内田謙三郎	長州藩	使役			20 両・毛布 1 枚
25	8 月 12 日	松浦多門	大村藩	使役			20 両・毛布 1 枚
26	8 月 15 日	中安泰治	秋田藩	監軍使役兼帯	奥羽鎮撫総督府		20 両・毛布 1 枚
27	8 月 20 日	添田清左衛門	秋田藩	監軍			20 両・毛布 1 枚
28	8 月 22 日	井石忠兵衛	大村藩	監軍使役兼帯	奥羽鎮撫総督府	戦地の見察・臨時の賞罰・戦場巡見・敵動静の報告	20 両・毛布 1 枚
29	8 月 22 日	松田次郎兵衛	大村藩	監軍使役兼帯			20 両・毛布 1 枚
30	8 月 22 日	中田謙太郎	秋田藩	使役			20 両・毛布 1 枚
31	9 月 9 日	木藤弥太郎	不明	監軍	奥羽鎮撫副総督府	戦地見察・臨時の賞罰・軍中取締	なし

「復古外記 奥明戦記」(「復古記 第十二冊」内外書籍 1930) より作成

〈表 3-2〉 慶応 4 年 8・9 月の奥羽鎮撫総督による人事任命一覧（任命月日ごと）

	月日	役職名					総計
		参謀添役	参謀添役 監軍兼務	監軍	監軍使役 兼帯	使役	
1	8 月 6 日			4			4
2	8 月 7 日	6					6
3	8 月 8 日					2	2
4	8 月 9 日		2				2
5	8 月 12 日					7	7
6	8 月 15 日				1		1
7	8 月 20 日			1			1
8	8 月 22 日				2	1	3
9	8 月	3					3
10	9 月 9 日			1			1
	総計	9	2	6	3	10	30

〈表 3-3〉 慶応 4 年 8・9 月の奥羽鎮撫総督による人事任命一覧（藩ごと）

No	所属名	役職名					総計
		参謀添役	参謀添役 監軍兼務	監軍	監軍使役 兼帯	使役	
1	長州藩	1	2	2		2	7
2	肥前藩	2		1		4	7
3	薩摩藩	1		1		1	3
4	秋田藩			1	1	1	3
5	大村藩				2	1	3
6	小倉藩	1				1	2
7	越前藩	1					1
8	弘前藩	1					1
9	筑前藩	1					1
10	長崎振遠隊	1					1
11	不明			1			1
	総計	9	2	6	3	10	30

〈表4〉慶応4年7～9月 秋田に来藩した援軍一覧

No	藩	隊長	総督による任命 (月日)	来藩した日時	備考	兵力
1	薩摩藩	和田彦左衛門	参謀添役 (8/7)	7月1日奥羽鎮撫 総督・副総督に随 行し来藩	7月6日仙北口に出撃	103
2	佐賀藩	田村乾太左衛門 福島礼助	参謀添役 (8/7) 参謀添役 (8月)	(7月6日佐賀藩増 援部隊 250 人土崎 湊に上陸)	7月6日仙北口に出撃	250
3	長州藩	桂太郎	参謀添役 (8/7)		7月6日仙北口に出撃	100
4	小倉藩	葉山平右衛門			7月6日仙北口に出撃	200
5	福岡藩				7月6日新屋口に出撃	141
6	弘前藩			7月1日 沢副総督 に随行		115
7	旗本生駒氏 (矢島)			7月8日	新政府軍に合流	354
8	旗本仁賀保氏			7月12日	庄内征討先鋒を願い 出	81
9	本莊藩			7月12日	庄内征討先鋒を願い 出	
10	新庄藩			7月14日	7月14日新庄城自焼、 以来仙北筋	
11	長崎振遠隊	石田英吉 軍監野村要輔・菅野 覚兵衛	参謀添役 (8/7)	7月24日		500
12	弘前藩	館山善左衛門 田中宗右衛門 和嶋安左衛門 成田求馬	参謀添役 (8月)	7月24日	最初新屋口に進むも8 月19日十二所口に出 撃	187
13	肥前藩			8月1日		658
14	平戸藩	総大将松浦大内藏 副将小荷駄方原 半平 ・多々良与平		8月11日 (8月14日)	8月17日新屋口に出 撃	200
15	大村藩	隊長大村右衛門 副隊長松田次郎兵衛		8月11日	8月16日神宮寺村へ 出撃	119
16	島原藩	隊長松平十郎右衛門 副隊長奥山十太夫		8月11日	8月16日神宮寺村へ 出撃	200
17	薩摩藩	島津登		8月18日	8月19日仙北口に出 撃	1000
18	肥前藩			8月18日		700
19	小城藩 (肥前藩)	田尻宮内		8月22日	300 人が大館に出撃	800
20	小城藩			8月24日		200
21	薩摩藩			8月26日		不詳
22	筑州藩			8月29日	沢主水正と共に船川 湊に到着	458
23	弘前藩			9月5日	花岡村に到着	250
24	佐土原藩	参謀船越洋之助・ 藤村六兵衛		9月8日	仙北筋に出撃	80
25	鳥取藩			9月11日	塩小路刑部少輔と共 に船川湊に到着、長 浜に出撃	450
26	肥州藩			9月20日	土崎湊へ到着	80
27	松江藩			9月24日	3 小隊は仙北へ、ほか は新屋口へ	400
合 計						7626

①「官軍来援兵員調・本藩出兵人員調・各軍兵火焼失調」(「戊辰秋田戦記 下筋口之部」AS212.1-82-2)・②「戊辰戦役援軍来藩之状況」(AH212.1-58)・③「慶応戊辰録抜書」(AH212.1-152)・④「戊辰秋田藩戦記」(「秋田叢書」第4巻)・⑤「本莊市史 史料編Ⅳ」・⑥「生駒藩史 讃岐・出羽」・⑦「仁賀保町史」より作成。兵力は生駒氏・仁賀保氏以外の数字は①に依拠した。①では官軍来援兵員を7158人としているが「兵数ノ多寡詳明ヲ欠ク」としており、実人数を確定することはできない。

存の兵力を効果的に動かすために行ったものといえる。

実は慶応四年八月に入ると、秋田藩も次々と新しい軍を編成し、戦場に投入している。³⁶ 中安の監軍任命は、次々と戦場へ投入される秋田藩の軍に下知を下すのに必要だと判断されたからであろう。

秋田藩士にとっての戊辰戦争は、藩領内に敵を迎えての防衛戦であり、海路秋田に来る応援兵力は援軍ということになる。だが戦争を遂行する奥羽鎮撫総督や参謀からすると、秋田藩の部隊も秋田に来させる応援兵力も奥羽鎮撫を達成するための兵力という点で等しい。直接的な命令関係にない部隊を動かして、戦争を有利に遂行するには、上位下達で軍令を伝えるための仕組みが必要だった。そのために八月上中旬に参謀添役・監軍・使役の人事任命を頻発したのである。

その監軍に秋田藩士中安泰治が任命される。秋田藩士が秋田藩の部隊を監視する、これが何を意味したのかを更に考えてみたい。

(2) 中安泰治の監軍任命

中安泰治は引渡の座格一六七石の藩士で、庄内出兵が開始された慶応四年（一八六八）閏四月十六日、軍将真壁安芸の検使役として土崎湊に出陣した。七月以降の対奥羽列藩同盟との戦争では、梅津小太郎手の遊軍頭として七月六日久保田

を発し、十五日矢島着、十七日に西馬音内、十八日に院内へ移動、そこで羽州街道を攻め上がってくる庄内藩・仙台藩と交戦、その後神宮寺へ退却した。

〈表3-1〉で中安泰治は、八月十五日に監軍に任じられたとあるが、彼の日記を見ると、八月十五日は「副参謀」という役職に就いたことがわかる。

〔史料14〕

一副参謀被仰付候趣、右衛門殿を以被仰渡候。

中安に副参謀という役職を任命したのは秋田藩家老小野岡右衛門である。だが秋田藩の職制に副参謀という役職は存在しない。これは奥羽鎮撫総督九条道孝、副総督沢為量、参謀醍醐忠敬、下参謀大山格之助に連なる新政府の役職である。それゆえ小野岡は、人事任命を伝達したに過ぎないといえる。もっとも、中安は遊軍頭と副参謀の兼任を負担に感じたのか副参謀職の辞退を申し出ている。

〔史料15〕

一副参謀相勤、兵隊進退指揮形兼勤迷惑二付、参謀御訟訴

申上候所、兵隊進退指揮形御免ニ罷成、一手之附属無残

石塚富之助え属し被置候。

結果は、遊軍頭として率いている配下の指揮は石塚富之助へ任せ、副参謀の職に専念せよというものだった。新政府といえども秋田藩内の軍制の人事まで直接介入できない。それ

ゆえ中安が相談を持ちかけたのは小野岡家老だと思われる。小野岡にとつては秋田藩の部隊の人事より新政府の役職の人事の方が優先である。中安を遊軍頭から外したのはこのためである。更に八月十八日、中安は小野岡家老から「御相手番格軍将」の任命を受ける。^⑩中安泰治は、新政府から副参謀の人事任命を受けたので、藩内における身分もそれに見合う格へと引き上げられたのである。

副参謀になった中安泰治の仕事は秋田藩部隊の視察であり、就任二日後の八月十七日に出かけている。

〔史料16〕^⑪

一早朝出立。船にて下り、強首村え罷越候所、川端番兵小屋老人も詰合不申、川岸へ船三拾艘余繋置、甚疎惰之至二候故、同所持場玉生六郎殿え罷越、副参謀被仰付御固場順覧致候所、番兵老人も無之、且つ数艘船繋被差置、甚疎惰之至懸合二及候所、戦士之内番兵差置候趣申聞二付、戦士え面談致候所、甚不具之申聞二付、沢殿え可申立示談二及候所、以来嚴重御固め致候故、被仰立方宜敷致具候様申出承知致候。

中安は神宮寺から舟で雄物川を下り、玉生六郎が在陣している強首村（現大仙市強首）を訪れ、玉尾に警備が手薄であることを指摘した。加えて玉生配下の藩士にも詰問している。その際、中安は沢副総督に報告すると言っているのも注目に

値する。その後、中安は更に雄物川を下り、左手子村（現秋田市雄和）に在陣している洪江内膳の陣も訪れた。その様子も見てみよう。

〔史料17〕^⑫

一左手子村御固所洪江内膳殿右持場順覧二及候所、内膳殿より伺、亀田領杉山田村・木瓜沢村・大正寺村、右村々賊徒征討之妨二相成候故、放火致度趣申出候故、御勝手二焼払可申差図致候。

軍将洪江内膳は中安泰治に亀田藩領の村を焼き払うつもりであることを述べている。中安も焼土戦術に同意している。

副参謀に就任する以前の中安は、梅津小太郎手の番頭代遊軍頭で二百七十人の兵を率いる部隊長に過ぎなかった。^⑬それが奥羽鎮撫副総督から副参謀に任じられた途端、玉生、洪江といった自分より格上の軍将たちの陣所を訪れ、警備の不手際を問いただしたり、作戦の相談を受ける立場になっている。藩内の序列では洪江や玉生の格下である中安泰治は、新政府の威光により彼らよりも高い位置に昇ったのである。

中安泰治は、神宮寺に滞陣する沢副総督の下で、諸藩応援部隊の他の参謀添役や監軍と共に、作戰立案や下知を行うようになるのだが、八月十九日の中安泰治の日記を見ると、これに不服を漏らした西南諸藩士がいたことがわかる。

〔史料18〕^⑭

一肥州嶋原勢五拾人余繰出、多分赤陣羽織、袴高袴、塗笠
 ニて古風ニ有之長州桂太郎・長崎振遠隊石田永吉・拙者
 相談之上、夫々差図致候所、嶋原勢大立腹。貴公方より
 差図可受筋無之杯と申聞候故、何之御差図申候筋ニは無
 之候得共、初て之御出兵故、地理御不案内ニ可有之、仍
 て御相談致候趣申聞候。にが森え繰出、樋岡村口え差向
 候。其後嶋原隊長え談判ニ相及候ニは、拙者共不肖ニ候
 得とも、老国之隊長も相勤候身分ニて御懸合ニ及候所、
 平士を以御挨拶被成候儀、如何致候御筋合に御座候哉承
 知致度趣談判ニ及候所、甚々迷惑なる模様ニて深く詫事
 有之斟酌致候。

中安は、桂太郎や長崎振遠隊石田英吉と共に、島原藩兵を
 動かそうとした。(表3—1)に示した通り、桂と石田は奥
 羽鎮撫総督から参謀添役に任命されている。しかし、島原藩
 士たちは島原藩主の命令で秋田に来ており、一国を代表して
 来たという自負がある。桂・石田・中安らが新政府の役職に
 就いたとはいえ、島原藩士たちからすると、彼らの出自は高
 いものではない。それゆえ素直に従えないのである。このこ
 とは、新政府軍の指図による指揮命令系統に違和感を覚える
 西南諸藩士がいたことを示す事例といえる。

中安が沢副総督から監軍に任じられたのは、八月二十一日
 である。

「史料19」

沢殿より御催促ニて罷出候所、別紙之通、御書付を以被仰
 渡候。

監軍 中安泰治

右兼て心懸宜鋪、此節別て致勉勵候二付、右之通申付候事。

辰八月

奥羽鎮撫総督府朱印

中安泰治

別紙之通被仰付候ニ就ては、秋田兵隊え被召付候事。

辰八月

中安を監軍に任命したのは沢副総督である。(表3—1)
 では奥羽鎮撫総督が任命したことになっているが、それは任
 命権者という意味なのかもしれない。任命の文言を見ると、
 中安には「秋田兵隊へ召付」すなわち秋田藩部隊へ命令下す
 権限が与えられている。

ふり返ってみると、慶応四年四月の戦争開始当初から、長
 尾、山本、上田ら薩摩藩や長州藩出身の監軍が秋田藩の軍将
 や小隊長級の指揮官へ細かい指図を下していたが、それらは
 皆、奥羽鎮撫総督から与えられた権限だったということにな
 る。

それから、中安の監軍任命は、藩主や藩庁を通したもので
 なかったことも指摘しておきたい。

〔史料20〕

一 檢使石川敬治殿・武頭山県三郎・高屋五左衛門え為知致候。

以手紙致啓上候。然は拙者儀沢殿より監軍被仰付、秋田兵隊え被召付候趣被仰渡候間、此段御吹聴致候。以上

八月二十一日

監軍就任前、中安は副参謀職にあり、既に監軍と同様の職務に就いている。それゆえ、この任命は後追いのものであり、中安は辞退することなく任命を受け、周囲の秋田藩士にもその旨を伝えている。

八月二十三日、秋田藩家老佐藤源右衛門から中安泰治に書状が来る。その内容は「参謀局より急御用有之候間、早打を以早々罷帰候様」というものであった。⁽¹⁶⁾これは、秋田藩の家老が参謀局の下働きをしている一つの姿を物語る。

参謀局の用とは何か。中安の日記八月二十四日条を見てみよう。

〔史料21〕

一 参謀局より御催促二付、昼九ツ時出立出府致、同夜八ツ時御旅館え着。参謀大山格之助え面談致候所、大館向御手薄二付、監軍形を以罷越見分可致。賊徒大勢・味方小勢二て迎も行届兼候ハ、自分兵隊繰出進撃可致被仰渡之

所、肥州勢貳千人当着二付、五百人被差向候故見分二不及趣書状申遣候得共、行違候間、左様可被差心得。中將様二て御用向も可有之間、御用済之上罷帰候様被仰渡候。

中安を呼び出したのは参謀大山格之助で、大館方面が手薄なので中安に手下を率いて大館方面へ出陣させようと考えていたが、到着した肥州勢五百人を差し向けるので、中安の大館行きは取り消すとある。この一文から、秋田における戊辰戦争の作戦は、参謀―監軍―軍将という形で下達されたことが明らかにになる。また文末の傍線部は「中將様（藩主）」にも用があると思う、それが済んだら帰れ」と言った参謀大山格之助の言葉であるが、これは戦時における新政府の参謀は、藩主よりも位置が高いことを如実に示している。

おわりに

以上本稿では、秋田藩戊辰戦争を指揮命令系統から、すなわち「命じる新政府」「命じられる秋田藩」という視角から論じた。これにより従来の研究で看過されてきた次の四点を見いだすことができた。

その第一は、秋田藩主及び軍将は、戦争の一連の軍事行動に主体的に関わったわけではないという点である。特に慶応四年（一八六八）七月から九月の戦争は、仙台・庄内・盛岡

藩の進攻を自領で迎え撃つ防衛戦争となつたにもかかわらず、軍事行動は、奥羽鎮撫総督、実質は参謀―監軍―軍将という伝達経路で作戦が伝わった。戦争を命じるのは参謀、そして戦場で軍を動かすのは監軍であり、ここには藩主や藩庁の役割はない。しかも、戦場では監軍が軍将を飛ばして小隊長に直接指図する場面が見受けられた。

それゆえ、秋田藩にとつての戊辰戦争とは、藩主や藩庁、そして軍将の指揮権なき戦争だったということが出来る。

第二は、対奥羽列藩同盟との戦争で、秋田藩は雄勝・平鹿・仙北三郡を仙台・庄内藩により占領されるが、これは戦争に負けたからではなく、神宮寺を拠点とする防衛戦を行うために撤退が命じられたことによるものだということである。これまで軍事史の視角から見た戊辰戦争論では、各部隊が使用した銃砲の発達段階で勝敗が決まると論じられてきたが、それは一面的なものに過ぎず、作戦を立案する参謀や、それを下知する監軍の責任も大きいといえる。

第三は、慶応四年八月に奥羽鎮撫総督による参謀添役・監軍・使役の人事が相次いだことである。これは、秋田藩に次々と兵力が送り込まれた時期と一致する。戦争は、秋田藩から見れば秋田藩戊辰戦争であるが、新政府側から見れば奥羽鎮撫の秋田戦線であり、そこで戦う兵力は藩軍の集合体である。軍を動かすには「指図」という間接命令系統以外になく、円

滑に作戦を伝えるためには、封建軍制を超えた仕組みが必要だった。それが参謀添役・監軍・使役の人事だったのである。そして第四は、秋田藩土中安泰治が監軍に任じられるが、その途端に中安は、藩内の軍制では上位にあたる軍将たちに意見できる立場になっているという点である。これは新政府の身分秩序は、従来の藩内の身分秩序を覆すものだったことを示している。

総じて、指揮命令系統から秋田藩戊辰戦争を見ると、新政府にとつて必要なのは、戦争を実際に戦う兵士の集団であつて、戦闘の場面では藩主や藩庁組織は全く不要なものだった。明治初年、新政府は矢継ぎ早に藩主を政治の場面から遠ざけ、藩庁機構も大幅に改変した。これが戊辰戦争を経てのものであったことを考えると、藩主・藩庁・軍将の指揮権なき戦争は、新政府が行った一連の改革の萌芽をなすものだったといえる。

註

(1) 明治時代に書かれた秋田藩戊辰戦争の著述を見ると、秋田藩が一貫した新政府側の立場を貫くことができなかったのは、白石会議に参加した家老戸村十太夫が、独断で奥羽列藩同盟に加盟したからだと言われている。(明治時代の歴

史像の形成については、拙稿「明治時代における秋田藩維新史像の形成」(『日本歴史』七七四、二〇一二年)、「復古記」編纂事業と秋田藩維新史像の誕生」(『秋田県立博物館研究報告』三九、二〇一四年)「秋田藩維新史における『砲術所藩士活躍説』の誕生」(渡辺英夫編『秋田の近世近代』高志書院、二〇一五年)参照のこと。昭和三十四年(一九五九)戸村家から秋田県立秋田図書館に寄贈された史料群の中に、戸村十太夫の同盟加盟の判断は藩主による指示だったことを示す文書が見つかり、明治以来の歴史像は否定されることになる。(『秋田県史第四巻 維新編』(秋田県、一九六二))

秋田藩の藩論形成の問題について、政治史・思想史の問題から切り込んだのは加藤民夫で「幕末期秋田藩の政治思想 平元貞治をめぐる三つの思潮」(『秋大史学』四六、二〇〇〇年)「明徳館と尊王攘夷運動」(『日本歴史』六三六、二〇〇三年)等がある。

平田派藩士の周旋運動から幕末秋田藩内の動向に着目したのは天野真志で「国事周旋と言路―幕末期秋田藩の政治方針をめぐる対立から」(『歴史』一二六、二〇一一年)、「勤王」秋田藩の苦悩―秋田藩士高瀬権平とその周辺」(『東北学』三〇、二〇一二年)、「平田延胤著『馭戎論』の成立状況」(『書物・出版と社会変容』一二、二〇一二年)、「王政復古前後における秋田藩と気吹舎」(平川新編『江戸時代の政

治と地域社会―藩政と幕末政局』清文堂出版、二〇一五年)等がある。

また工藤威は、奥羽列藩同盟の成立から終焉までを見通した中で秋田藩が離脱した問題を論じている。(『奥羽列藩同盟の基礎的研究』岩田書院、二〇〇二年)。

(2) 栗原伸一郎『戊辰戦争と「奥羽越」列藩同盟』(清文堂出版、二〇一七年)。

(3) 「秋田藩家老連署内書他」(秋田県公文書館AT2121.661、以下資料番号は特に断りのない限り同館所蔵)。

(4) 戊辰戦争の特質を戦争(戦状)届書から見いだしたのは箱石大で「戊辰戦争史料論―戦状届書に関する考察を中心として」(明治維新史学会編『明治維新史研究九 明治維新と史料学』吉川弘文館、二〇一〇年)、「戊辰戦争の史料学」(勉誠出版、二〇一三年)に詳しく述べられている。

(5) 「戊辰秋田藩戦記」七月六日条(『秋田叢書 第四巻』秋田叢書刊行会、一九二九年)八二頁。

(6) 保谷徹『戦争の日本史一八 戊辰戦争』(吉川弘文館、二〇〇七年)・青山忠正『日本近世の歴史(六) 明治維新』(吉川弘文館、二〇一二年)。

(7) 加藤民夫は、秋田藩戊辰戦争で秋田藩が有利に戦えなかった理由として、半端な形でしか軍事・軍制改革を成し遂げられなかったことが原因であるとしている。(『秋田藩の軍制改革(一)(二)』(『出羽路』一三三・一三二、二〇〇二年)。

二〇〇三年)。

- (8) 「秋田戊辰勤王回顧座談会記録」(AH212.141)。
- (9) 「復古外記」奥羽戦記 第十八(内外書籍、一九三〇年)巻末に各藩の動員兵力の表があり、その中で仙台藩は一四三二一人、庄内藩は四大隊、盛岡藩は一大隊八一人とある。
- (10) 前掲註(5)「戊辰秋田藩戦記」四月十八日条、二八頁。
- (11) 前掲註(5)「戊辰秋田藩戦記」閏四月二日条、三二頁。
- (12) 長瀬直清「新聞秘録」閏四月六日条(混架7581-18)。
- (13) 大館戊辰戦史編纂会「大館戊辰戦史全(復刻版)」(名著出版、一九七三年)一四頁。
- (14) 長瀬直清「慶応四丙辰日誌」閏四月十日条(秋田市立中央図書館明德館所蔵)。
- (15) 前掲註(5)「戊辰秋田藩戦記」閏四月十三日条、三六頁。
- (16) 前掲註(5)「戊辰秋田藩戦記」閏四月十五日条、三七頁。
- (17) 前掲註(5)「戊辰秋田藩戦記」閏四月十三日条、三六頁。
- (18) 前掲註(12)「新聞秘録」閏四月六日条。
- (19) 前掲註(12)「新聞秘録」閏四月六日条／「書簡写」(大仙市アーカイブズ 高階家文書4103)。
- (20) 「石川教定庄内出張日記」閏四月十九日条(「横手市史資料編 近世Ⅱ」六八九頁)。
- (21) 前掲註(5)「戊辰秋田藩戦記(新屋口)」閏四月十八日条、二四三頁。
- (22) 前掲註(5)「戊辰秋田藩戦記」閏四月十八日条、三八頁。
- (23) 前掲註(5)「戊辰秋田藩戦記」閏四月十八日条、三八頁。
- (24) 「秋田藩士芳賀織右衛門、庄内・雄勝より神宮寺転戦日記」閏四月八日条(「横手市史資料編 近世Ⅱ」六九五頁)。
- (25) 前掲註(12)「新聞秘録」閏四月十九日之矢嶋口二番手陣場奉行より来書廿一夜着。
- (26) 「戦争始末取調書」(AO212.96)。
- (27) 貝塚久吉(諱清直)は十九石五人扶持の秋田藩士である。貝塚久吉が戦争中につけていた貝塚清直「出陣記録」は、貝塚俊清が昭和十五年にガリ版で翻刻したものが秋田県立図書館(A212.21)にあるが、本稿では貝塚清成氏が二〇〇五年に翻刻した私家版の小冊子を使用する。なお私家版小冊子は秋田県公文書館に寄贈され、同館で閲覧することができる。(06-1280)。
- (28) 「書状」(戊辰戦争指令)(古内124)。
- (29) 前掲註(27)「出陣記録」八月八日条。
- (30) 前掲註(27)「出陣記録」八月十二日条。
- (31) 大瀬貴誠「戊辰戦争記事」(「横手郷土史資料」一六)三三頁。
- (32) 「覚」(古内133)。
- (33) 前掲註(27)「出陣記録」九月一日条。
- (34) 「書状」(古内1162)。
- (35) 「復古外記」奥羽戦記 第十六明治元年九月十九日条七四九頁

(36) 拙稿「人事記録から見た秋田藩戊辰戦争」(『秋大史学』六三、二〇一七年三月)。

(37) 中安泰治「陣中日記」(AS21.57) 八月十五日条。

(38) 前掲註(37)「陣中日記」 八月十六日条。

(39) 前掲註(37)「陣中日記」 八月十八日条。

(40) 前掲註(37)「陣中日記」 八月十七日条。

(41) 前掲註(37)「陣中日記」 八月十七日条。

(42) 前掲註(1)『秋田県史 第四巻 維新編』二七〇頁。

(43) 前掲註(37)「陣中日記」 八月十九日条。

(44) 前掲註(37)「陣中日記」 八月二十一日条。

(45) 前掲註(37)「陣中日記」 八月二十一日条。

(46) 前掲註(37)「陣中日記」 八月二十三日条。

(47) 前掲註(37)「陣中日記」 八月二十四日条。

〈付記〉

本稿は、平成三十年五月十九日に開催した大仙市「明治150年」事業ふるさと探訪講座「部隊移動と戦闘から見た秋田藩戊辰戦争―古内左惣治隊を中心として―」(秋大史学会近世・近代部会例会報告を兼ねる)及び同年八月十九日に開催した大仙市明治一五〇年シンポジウム「近代への道程―戊辰戦争と人びと―(秋大史学会共催)「秋田藩の視点から」をもとに構成したものである。